

立教開宗に於ける傳承と創意との關係

藤 原 了 然

立教開宗といふことは、一つの創意を意味する。通佛教に對して又在來の諸宗に對して何んらかの本質的な創意なくしては立教開宗といふことは成り立たないであらう。

しかし、こゝでいふ創意とは一體いかなるものであらうか。

形式的に考へるならば、立教開宗といふことは、經論に於ける正依傍依の選定と、教義内容に對する教相判釋をその根本要件とするものである。しかしながら、萬餘の經卷の中からその五三を選んでこれを正所依とし、法門八萬四千の中から一門を選んで、これに命を托するといふが如きことは、極めて慎重を要すると共に又容易の業ではない。そこには確固たる指導理念がなければならぬ。すなはち一切を洞破し鑑別すること恰も快刀亂麻を斷つが如き明快なる知的、信的な見識あるものにしてはじめてなしうることである。

この見識が、普通には宗祖の内的經驗と呼ばれる、従つて、淨土一宗存立の根據並にその創意的なもの、根源はすべて宗祖の内的經驗をその基調とするものであるといふことが出来るし、淨土宗現象一切の當否を糺す鑑も亦たこの

宗祖内の經驗への順違をその指針とするものと考へられる。従つて、淨土宗に於ける創意的なものゝ悉くは、宗祖内の經驗の創意性の顯現に外ならぬものと解されなければならぬ。

二

しからば、かくの如き宗祖の内の經驗といふものは、いかにして生じ又如何なる貌に於て把握される性質のものなのであらうか、もしそれ、宗祖の内の經驗が單なる獨善や果敢なき妄斷に根據するものであるならば、淨土一宗は所詮根なき花であり、邪教たるの外はない。

このことの論明に對して、從來、佛教的常途としてとられ來つたところの傳統相承の高調といふことの意味が考へらるべきである。三國傳來瀉瓶相承、一器の水を一器に瀉すが如くに傳々して今日の宗義ありとなすは、各宗の最も力説するところである。直授相承、口決相承が重視されるのもこれがためである。

けれども、實のところ、かくの如き方法は一難を避けて他の一難を招くの結果を將來せずにはおかないものがある。何故ならば、一器の水を一器に瀉すといふ如法なる相からどうして創意的な一宗開創といふ如きことが割り出されうるかといふ疑問を生ぜざるを得ないからである。

いひかへれば、一宗々義の根源たる立教開宗に於ける宗祖の心的内容として、いかにして傳統的なるものと創意的なるものとの背反が統合抱擁されうるかといふことの究明がなされなければならぬ。

三

こゝに於て立教開宗の原意が、更に根本的に顧みられなければならないことになるが、この要請に關連して想起さ

るべきは、この立教開宗といふ言葉と同義語として扱はれてゐる、領受開顯の内容についてある。

領受とは讀んで字の如く、先聖祖師の教法を領解受得することであり、開顯とはいふまでもなく、この領受したものを時代的性情の中に展開顯示することに外ならない。

けれども、實際的に考へてみるならば、祖師の教法を領受するとはいふものゝ、各の祖師の教説は必らずしも一樣に律するわけには行かない。極言するならば、その表現や形式に於ては一として同じものはないといつていゝ。かくの如き種々雑多なるものゝ一々をその貌のまゝに於て領受するといふことは凡そ不可能でもあるし又意味のないことゝ謂はねばならぬであらう。そして又かくの如き貌の上に於ける種々相を問題にするならば、傳統の祖師の間に於ける相承の意味も成り立たなくなる筈である。

こゝに於て關心を新にさるべきは、かの釋尊説法の特性たる對機説法といふことである。對機説法といふことは、言ふまでもなく甲機甲病に對しては甲教を説き、乙機乙病に對しては乙教を示すといふ説法形式である。この際、甲教と乙教との形式的な相違を以て、釋尊教説の眞相を論ずるが如きは當らざるの甚しきものである。こゝに銘記さるべきことは、同一の佛陀自内證が、甲機に對しては甲教として説かれ乙機に對しては乙教として示されたといふこと、でなければならぬ筈である。この故に、平面的に甲教と乙教との優劣高下を論ずるが如きは妥當ではない。眞の論究は、佛自内證が甲教として現はれ或は乙教として示されたその過程の當否に向けられなければならない。

佛陀自内證が常恒不變の理たるはいふまでもない。けれども、この自内證はその不變性を眞に保持するために常に特殊の諸相をとること恰も水の本性に依るものがある。水の本性は靜寂にある。方圓の器に隨ふのも靜寂に向つての

努力に外ならぬ。けれども、水の實際は常に流動止まざるものがある。この故に水の本性を流動にありとなすは當らざるものである。水の流動は、靜止の本性への不斷の努力と解されなければならぬ。佛陀自内證の理についても同じことが謂はれうる、常恒の理がその本性を保持するためには、時處位に即する不斷の隨處爲主的な顯現と動きとがなければならぬ。もし爾らずして凝然たる常恒の相を固守しやうとするならば、それは常恒の理の觀念化であり、眞の常恒の理の常恒の理たる所以の破棄でしかない。

かく考へ來るならば、傳統祖師の教説に於ける夫々の特殊相のすべては、これごとく常恒の理たる佛陀自内證の現實的な開顯の種々相に外ならないといふことが知られる筈である。従つて、この理によるならば各祖師の教説相互の間に於ける貌の相違や差別の如きは問はるべきではない。要は各祖師の教説そのものが、佛陀自内證の如實なる時代的顯現であるかどうかといふことが問はるべきである。

こゝに各祖師の教説の眞の意味が理解されうるであらう。各祖師の教説の意味は、各時代に於ける佛陀自内證を把握せんとす眞摯なる努力の足跡にすぎない。従つて、後人の祖師教説に對する立場はこれらの祖師の教説を鑑として、自らの時代に於て佛陀自内證に接近せんとするにある。

しかしながら、單刀直入、眞向から佛陀自内證に接近せんとするといふが如きはその途を過るものである。このためには常に傳統祖師の教説を座右の銘として不斷の精進が續けられなければならぬ。各祖師の教説に徹するとき、そこに自づから揆を一にする方向が確認されるであらう。この方向こそ正しく佛陀自内證への捷徑なのである。そして又、この方向の把握こそ眞の傳統といふことが出来る。傳承の正意は正にかくの如きものでなければならぬ。

傳承の意味がかくの如きものであるならば、傳統の把握そのまゝが新しき現實相への開顯を意味する。時代的な衣装をまとふ教説の展開が當然なされなければならぬ。この展開の諸相が、創意と呼ばれるものである。

四

この故に、立教開宗に於ける傳承的なもの、創意的なるものととの背反はありえない。傳承とは固陋なる形式の墨守ではなくして、眞なるもの即ち佛陀精神の實質的把握といふことに外ならない。それは佛陀への復歸と稱して、これに對して、創意とは傳承の時代的な開顯に於ける形式又は貌の新しさに外ならぬ。それは決して徒らなる新奇に走ることでなくして、眞實なるもの、最も如實なる開顯に於ける新しさでなければならぬ。領受即開顯と言はるゝのも亦この間の消息を物語るものである。

五

如上のことは、宗祖教説を一瞥しても充分に領解されうる筈である。

宗祖教説の肝要は選擇の二字を以て掩ふことが出来るであらうが、かの選擇集本願章の中に、一切の諸行を選擇し唯だ偏へに念佛の一行を選擇する理由として、

「答へて曰く、聖意測り難し、輒く解すること能はず。今試みに二義を以て之を解せん。一には勝劣の義、二には難易の義なり。初めに勝劣とは、念佛は是れ勝、餘行は是れ劣。所以はいかん。名號は是れ萬德の所歸なればなり。然らば則ち、彌陀一佛の所有の四智三身十力四無畏等の一切の内證の功徳、相好光明說法利生等の一切の外用の功徳、みな悉く阿彌陀佛の名號の中に攝在せり故に名號の功徳を最も勝れたりとなす。餘行は然らず、各の一隅を守るのみ。是を以て劣となす。譬へば、世間の屋舎の名字の中には棟梁椽柱等の一切の家具を攝すれども、而も棟梁等の一々の名字の中には一切を攝すること能はざるが如し。こゝを以て知る

べし。然れば則ち佛名號の功德は餘の一切の功德に勝れたり。故に劣を捨てて勝を取りて以て本願としたまふか。次に難易の義とは、念佛は修し易く諸行は修し難し。この故に往生禮讚に云はく……念佛を勧むることは是れ餘の種々の妙行を遮せんとはならず。只だこれ男女貴賤行住坐臥を簡はず、時處諸縁を論ぜず、之れを修するに難からず、乃至臨終に往生を願求するに其の便宜をうることを念佛に如かず已上。故に知んぬ、念佛は易きか故に一切に通ず、諸行を難きが故に一切に通ぜず。然れば則ち一切衆生をして平等に往生せしめんがために、難を捨て易を取りて以て本願としたまふか」

論策、博引彥證を要しないであらう。眞に佛意大悲に徹するもの、まことの傳統把握者にしてはじめてこの言あるを想はねばならぬ。最勝の法を最下の我に配せんとする衷情亦たこゝに根ざすものに外ならぬ。

又この確信あるところにこそ、淨土宗の創意的行への邁進が展開されうるのもある。